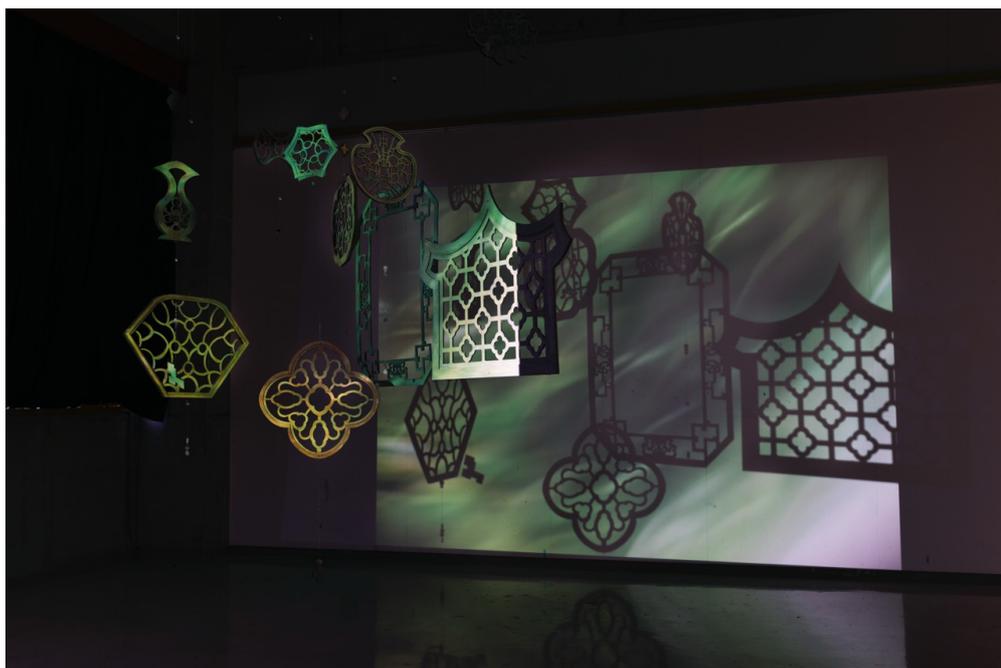


美術専攻 洋画研究領域

シヨウ カエイ

蔣 可盈



Daydreamscape Through Windows

木、糸、映像

Daydreamscape Through Windows

本研究は、「庭」という、自然と人工、記憶と現在が織りなす矛盾した宇宙を出発点とする。その原点は、私の原風景である蘇州の庭園にあり、そこには単なる美しさを超えた、幼い心の避難所となった温かい記憶が息づいている。成長とともに、庭は自然への憧れと、それから遠ざかった人間の営みという、二つの背反する感情が凝縮された「場」として立ち現れてきた。この緊張感の中にかこ、人間存在の本質に迫る表現の可能性があると信じ、筆を執った。

当初の絵画表現から、空間そのものへと広がった探求は、修士課程において、より内面的で身体的な「体験」としての庭園を求めるようになった。その過程で着目したのが、故郷・蘇州の庭園を特徴づける「漏窗」であった。それは単なる開口部ではなく、世界を選び取り、絵画的に再構成する「眼」であり、過去と現在を静かにつなぐ「記憶の鏡」なのである。私はこの窓を通して世界を見て育った。祖父が手入れする蘭の鉢、夏の午後に漏れる木洩れ日、冬の霜が付いた石の肌…。窓枠は、移ろう季節と家族の営みを、一枚の生きる絵巻物へと変える、私にとって最初の額縁だった。

したがって、修了制作は、この「窓」そのものを主題とし、それを通して見た「心象の風景」を再構築する試みである。CGなどの技術は、あくまで記憶の色合いや質感を翻訳するための媒体でしかない。むしろ私が追求するのは、映像という光の媒体そのものの特性—その透過性、反射、ぼやけ—を用いて、「記憶の窓」が持つ情感を甦らせることである。制作した複数の窓は、私の人生の節目に存在した実在の枠組みだが、そこに映し出されるのは、もはや現実の風景ではない。蘇州の庭の記憶、日本での生活、そしてそれらを隔てつつも繋ぐ、郷愁と発見が混ざり合った、私だけの「内なる庭」の風景である。

歩を移すごとに景色が変わる「移歩換景」のように、この作品は、鑑賞者の位置や心のありようによって、見え方が変容することを願っている。それは、特定の場所の記録ではなく、誰もが心に持つ「隔てながら結ぶ」という普遍的な経験への、一つの詩的な応答である。窓は、内と外、自己と他者、過去と現在の境界であると同時に、それらがやわらかく交融する場所でもある。本作品が、見る者それぞれが自らの「記憶の窓」をのぞき込み、そこに広がる光と影の対話を感じるきっかけとなれば幸いである。